

セブ島に学ぶ

東洋大国際地域学部研修から

* 6 *

報告者

国際地域学科2年

植竹 聡美

同

金子 華英



植竹 聡美さん



金子 華英さん

男らしさ、女らしさ

突然ですが、あなたは「男は外で働き、女は家で家事をするもの」と思っていますか？

これは、幼いころから自然と養われてきた「男はこうあるべき、女はこうあるべき」という考えにもとづいており、昔からある「男は度胸、女は愛嬌」という言葉にも表れています。たとえば、「男の子は泣くな」とか、「髪の毛が長いことやスカートをほくことは女の子らしい」と耳にしたことが一度はあるでしょう。

このよつな考え方は誰が決

貧困から夫が暴力

NGOが避難所に女性の自立支援も

めたのでしょうか。実は「男らしさ」「女らしさ」は歴史や文化、社会環境によって変化していくものであり、これをジェンダーといいます。時に性差別―家庭内暴力や雇用

格差―に繋がる問題でもあり

ます。フィリピン大学セブ校で、フリーリンでも有数の女性団体「フェルナンデスさんから、ジェンダー問題についての講義を受けました。フリーリンでは女性の経済的・社会的地位が低い、しばしば家庭内暴力が問題になります。私たちは、その現状と解決に向けて取り組む女性団体の活動について、調査を行うことになりました。

地域と結びつき

調査地バランガイ・ルスでは、「バンタイ・バナイ」(「家族やコミュニティを



バランガイ・ルスの女性たちが設立した生協の前で、立ち寄った女子学生とともに

見守る」という意味)というNGOのメンバーに話を聞くことができました。この団体はメンバー全員が女性によって構成され、夫から暴力を受けている女性を助ける活動などを行っています。暴力を受け、助けを求めてきた女性のカウンセリングを行ったり、夫を妻に近づけさせないよう誓約書を書かせたりすることもあります。その存在が住民に広く知られていることから、バンタイ・バナイは地域の女性たちが安心して駆け込める、いわば避難所になっています。多くの女性がバンタイ・バナイに助けを求めてお

り、暴力を見つけた住民も率先してこの団体に報告して

ます。地域住民との強い結びつきをもつNGOです。また



インタビューに答えてくれた家族

女性の自立支援として、職に就くために必要な技術を身に付けさせたり、定期的にミーティングを行ったりしています。このような活動は、社会的立場が弱く発言する機会が少ない女性が、家庭内暴力の問題を表に出す手助けとなつていきます。

希望もたらず活動

私たちは、実際に8人の女性にインタビューしました。アイダさん(41歳)は夫からの日常的な暴力や貧しさに苦しみ、バンタイ・バナイに助けを求めました。その結果、別居するための契約手続きをとることができました(フリーリン人の多くはカトリックのため、離婚が認められていません)。さらに、バンタイ・バナイは月々8000ペソの援助を彼女に与えています。彼女は、その活動に感謝し満足していると答えています。

グロリアさん(50歳)は夫の暴力から逃れるため、家族と別居しています。夫は溺愛する息子のみに養育費を費やし、その他の子供の養育費はグロリアさんの姉が援助しています。グロリアさんは化粧品販売の仕事に就いています。収入は「くわず」で団体から月々2000ペソの支援をうけています。彼女もアイダさんと同様にこの団体に感謝していると言っていました。

調査を終えて、スラムにおける家庭内暴力の原因も見えてきました。まず、ドラッグや酒に溺れた夫が生活費を出さず、妻と口論になるケースがあります。仕事に就けない夫がストレスから妻と喧嘩する場合もあるようです。貧しさが家庭内暴力につながることも多く、問題の抜本的な解決のためには貧困の克服が不可欠です。バンタイ・バナイも、そこまで踏み込んで解決を探っているわけではないようです。しかし、女性自身によるポジティブな活動は、被害を受けている女性たちに希望をもたらしており、非常に意味のある活動だと評価できます。